
Firne ~ 恋、おとぎ話 ~

カモシカ太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F i r n e 恋、おとぎ話

【Nコード】

N 9 2 6 8 I

【作者名】

カモシカ太郎

【あらすじ】

エルフとジャイアント。それは、決して許された恋では無かった。国を追放されたジャイアント『ワイズ』が真実を求める旅に出る。

序章

いつになれば終わるのだろうか？

そんなことを考えている余裕さえも無かった。いや、それは今となっては全く無意味な行為だと誰もが知っていた。

必要なのは『勝利』の二文字。ただひたすら目の前の敵を倒すしかない。ただそれだけが自らの種族の生きる道。我が軍の未来、自分の明日のため。

幼き時から厳しい訓練を重ね、ただ敵を殺す術を叩きこまれる。

弱いものは生き残れない。

それは戦闘の場だけでは無い。この世界では生きるための最低条件であつた。

そこは、弓から放たれた矢が飛び交っていた。相手から放たれた矢が大型の木の盾に突き刺さる。並の力ではこの盾は使いこなせないだろう。

わずか7人となつた小隊の隊長らしき人物が後ろを振り向き、残りの者へ気合いをかける。

その姿は一見女性と間違えてしまうような整った顔立ち、肩まで伸びた赤い髪には驚くほど不釣り合いな鋭い目。そして長身に細身に見えるが引き締まつた筋肉。

怖い。

彼に睨まれた者の正直な感想であった。それほどまでに鋭い目付きをしていた。

「怯むな！ 我が軍の勝利のため！ 兄者との約束を忘れたか！？」

『ははっ！』

叫びにも似た返事を返した。そして隊長らしき人物は腕に刺さっていた矢を引き抜く。表情を全く変えずに簡単に実行する姿には寒気さえもする。

『……ふん、ガキの玩具が』

引き抜いた矢を見たかと思えば、馬鹿にしたように鼻で笑った。それを片手の指を使いへし折る。音をたてて矢が別の形に変わる。

「行くぞ！ 俺に続け！」

『っ！！』

小隊が盾を構え、雄叫びをあげながら相手の群れに向かって突進して行った。躊躇は一切しない。ただ目的に向かって突撃するのみ。

そして7人の小隊が1つの群れに向かって激突した。敵はまる

で象に突進されたかのように弾け飛び、宙を舞った。その様子を見て他の敵は一瞬で驚きの顔を浮かべた。

『くっ！』

敵のうちの一人が恐怖に耐えきれなくなったのか、その場から立ち去ろうと背を向けた。その瞬間。

『ギヤアアアッ！』

自分よりも巨大な剣により胴体を斬られる。いや、この場合は『斬る』と言うより『叩き割る』といった表現が的確だろう。この剣切味こそ無いのだが、あまりにも巨大すぎるゆえ、振り回したときの威力は想像を絶するものだった。

その証拠に敵は数メートル吹っ飛んだかと思えば、一瞬足りとも動かなくなってしまった。

「戦場で敵に背を向けるとは、愚かな種族だ！」

そう叫び、小隊の隊長は巨大な剣を振り回したときの、次々と敵を倒していく。一振りでも何人もの敵が吹っ飛んだ。

敵は耳い長が特徴の種族だった。体長も敵の小隊よりも半分ほどしかなく、弓の扱いを得意としている彼らにとって接近されているこの状況は確実に不利である。

小隊が敵軍と戦っていたまさにその瞬間。

『ギヤアアア！』

小隊一人の叫び声が鳴り響いた。隊長が声のした方を振り向いた。

同時に数発の矢が勢いよく小隊を目がけて向かってきた。反射的に矢を大型の剣で弾く。

『ぐはっ！』

反応出来なかった小隊の胸に、容赦なく矢が突き刺さる。確実に急所を狙ったその技はただ者ではない。

「くっ…誰だ！？」

隊長を含め、奇襲を回避した三人は叫んだ。

やがて敵が姿を現す。どうやら敵も少数で構成された部隊のようだ。赤で統一された鎧は、守りよりも動きやすさを重視している。隊長が呟いた。

「なるほどな…ガーディアンか」

ガーディアン。

それは戦闘のスペシャリストのみで構成された精鋭部隊である。機動性を重視して、少人数で構成されている。敵軍から最も恐れられている部隊だ。

ガーディアンのうちの一人が小隊の隊長に向かって話し掛けた。

「部隊が全滅仕掛けてるとの情報を聞き、応援に来てみれば…。ワイズがいるとは……とんだ獲物がいるようだな。貴様を殺せば長も

「喜ぶことだろう」

小隊の隊長の名をワイズと言った。敵にも広く名を知られていることからわかる通り、その赤髪、鋭い目、そして一騎当千と言っても過言ではない実績から、耳長からは『戦鬼』と呼ばれ恐れられていた。これほど彼を表現するのに適した言葉は無いだろう。

ガーディアンはあつと言う間にワイズを取り囲んだ。そしてワイズに向かって言い放つ。

「今日で貴様も終りだ。随分呆気ないものだな」

ワイズは不気味な笑みを浮かべると自らを取り囲んでいるガーディアンに向かって言った。

「お前達は何か勘違いしていないか？　だが、たった5人で俺の前に現れたことだけは評価してやろう」

そう言っつてワイズは全身に力を込める。

すると体中の筋肉が先程の倍近くに膨れあがった。そして、普段の冷酷で鋭い顔からは想像も出来ない不気味な笑みを浮かべた。

これが一般的に言う『キレる』というものだろうか？

そして足を顔の位置まで上げて、地面に向かって勢いよく叩き付けた。

凄まじい音と共に大地が揺れる。

『!?!』

ガーディアン達が怯んだ瞬間、ワイズが跳びかかった。

振り回される大剣をガーディアンは膝の力を抜き、しゃがみこむようにして間一髪でかわした。そして後ろに跳び跳ねる。

それをみた小隊の残り二人も一斉に敵に向かってゆく。

『くっ!』

ガーディアンが着地と同時に素早く弓を構える。その隙にワイズが距離を縮めた。今度は敵の胸ぐらを掴み、別のガーディアンに向かって投げ飛ばした。

飛んできたガーディアンを受け止めると、衝撃で後ろに倒れる。

「ワイズさん…逃げてください……」

不意に隣から声が聞こえる。小隊のうち生き残っているのはワイズを含め二人だった。しかし、残りの一名も先が短いのが一目で分かった。体中に矢が突き刺さり無惨な状態になっている。

その光景を見たワイズの脳裏にある一つの映像が浮かんだ。

黒髪の少年がいた。

地を這っている。

身体中矢が突き刺さっていた。

それでも進み続けた。

やがて力尽きたのか動きが止まる。

なんだこれは？

少年は蚊の泣くような声で呟いた。

『……………ネ……………ず……………会いに……………』

聞こえない。コイツは誰なんだ？

そして今度はどこからか女の声が聞こえた。

『クォーター…クォーター…』

クォーター？

その時だった。

「隊長!!」

隊員の言葉で我に帰った。肩に激痛が走った。

「くっ!!」

矢は隊員のトドメとなりその場に倒れてしまった。ワイズの肩にも矢が突き刺さっている。

「俺だけが逃げるなんてこと出来るか! それならば死を選ぶ!」

叫ぶと同時に、一気に身体中の力が抜けた。それを見てガーデイアンがワイズに向かって言った。

「どうだ? 毒の魔法を込めた矢の威力は。魔法でしか治すことが出来ない」

そしてさらにワイズに矢が突き刺さる。

「ぐはっ!!」

しかしワイズは起き上がり、敵に向かって行った。

「ならば……お前らを全員道連れにするだけだ……」

再び不気味な笑みを浮かべながらガーディアンに遅いかかった。

反撃しようとしたガーディアンに他のガーディアンが叫んだ。

「待て。ヤツはもう永くない。それに、ヤツは指一本でも戦うだろう。出来るだけ被害は抑え無駄な戦いは避けるべきだ」

「了解」

そう言つと、ガーディアンたちは退散して行つた。ワイズが必死に追い掛けるが次第に意識が無くなってゆく。

雪が積もっていた。やがて風が吹き、吹雪となる。
どれほど経った？

それさえも分からなかった。雪原の中、ただ一人倒れこんでいる。

「一つだけ分かることと言えば、自分の命があと少しで無くなる
と言っているくらいだ。」

寒さには慣れている種族とはいえ、瀕死の状態にはきつい。

「俺は…ここで死ぬのか…」

意識が遠くなる。

兄者…すまない……

ジャイアント族が真の勝利を掴むまで戦い続けるつもりだった
が…。

どうやらここまでのようだ。

そして瞳を閉じた。

『……え……か……?』

.....

『も……もし……』

.....

『き……えますか？』

ああ、そろそろ消える……。

『聞こえますか？』

『もしもし』

「ん……」

ゆっくりとまぶたを上げる。とても重い。

『よかった……無事みたいですな』

俺の前にあつてはならないことがおきている。俺は相手の顔を睨みつける。そして声を絞り出すように言った。

「く…エルフか…」

死ぬ間際に見たものが耳長とは……。

「殺せ……俺は誇り高きジャイアント族だ……。情けは無用……」

言葉を口にするたびに傷が痛む。だが少しの命。俺は言い放った。

「エルフに治療されるなど、もつての他だ……。ころ…せ…」

「がはっ」

そう言つて咳き込んだ。降り積もった雪が赤色で染まる。

『ほら、動いちゃダメですよ。今治療するのでまっけてくださいね』

「やめておけ…俺を誰かわかっていてやってるのか？」

俺は相手を睨みつけ、続けた。

「今まで戦争でどれほどのエルフを殺したか…」

「エルフ共に恐れられているジャイアントだ…お前が俺を治療した

のなら……」

相手は表情一つ変えずにこちらを見ている。

「俺は真っ先にお前を……殺す」

『だったら治ったら殺せばいいでしょう？ とにかく今はお黙りなさい』

「!？」

手が優しい光に包まれた。それを傷口に当てる。

傷が……消えていく…

『はい、無事に終わりましたよ』

体が驚くほど軽かった。俺は状況を理解出来ず、ただ立ち尽していた。

『それでも私、地元ではヒーラーをしてるんですよ。アナタが殺したというエルフ、もしかしたら助かってるかもしれませんね』

そして眩しい程の笑顔をこちらに向けて笑った。薄いピンク色の透き通った髪は背中まで伸びている。目が細い種族のはずだが、コイツはパッチリとした目をしている。しかし、長い耳が何よりもエルフと言う証拠であった。

『あは』

「……………」

何がなんだかわからない。馬鹿にされたのか？ 俺は……コイツに……。

「なぜ……助けた？」

エルフは真顔になると、真剣な様子で答えた。

「よくわかりませんね。ヒーラーらしく、目の前の怪我人がほっとけなかった、とでも言うっておきましようか」

「一応礼は言っておく。だがな……」

一呼吸置き、再び睨みつけながら言った。

「次会ったら間違いなく命は無いと思え」

それを聞いたエルフは笑顔で答えた。

「はい」

俺は背を向け歩き出した。

するとエルフが俺に向かって叫んだ。

『実はナイルの南東にある小さな湖にしょっちゅう遊びに行ってるので、良かったら来てくださいな』

『あは』

俺は振りかえることはなかった。

1章

ひたすら無心で歩いていた。

そして歩みを止める。

考えても答えは出ないことがわかっているのに。

真っ白な雪原の中にただ一人、立ち尽くす。

「さて、今日も行くかな…」

俺はナイルへと向かった。

ナイル。ここはジャイアントが古代から暮らしている場所。奥に巨大なナイル城があり、行く道に民家や店などが立ち並んでいる。

俺は産まれも育ちもこの街だった。

幼い頃に才能を見い出された俺は、ひたすら戦闘の術を教えてもらった。そして戦場では、ただひたすらジャイアント族の勝利のために戦った。

しかし……。

最近はよくわからない。

そして、こんなことを考えている俺自信も。

そんなことを考えているうちにナイル城へとたどり着いた。

『ワイズ様、御勤めご苦労様です』

「ありがとう。報告に戻った。開けてくれ」

『ははっ！』

高い金属音をたてながら扉がゆっくりと開いた。そのまま王が座っている部屋に移動する。

そこはいつ何が起きても対応出来るように部屋の両端に武装した兵士が並んでいる。

俺がその間を通ると、武器を天井に向かって上げて。そして、全員合図も無しに綺麗に元の姿勢に戻った。

俺は一礼したあと、王に向かって歩み寄った。

「只今戻りました。兄者」

「うむ。ご苦労様であった」

目の前にいる歳はとっているはいるが、まだまだ衰えを感じさせない肉体、何もかも見透かしているような目をしているこの人物は、ここ、ナイル城の王。長年に渡り、ナイルを治めてきた人だ。ジャイアントは兄弟意識が強く、例えば血が繋がっていない方がいいが、皆兄弟と言う呼び方をする。

「なにかエルフ族に関する情報は手に入ったか？」

「いいえ…敵…、エルフはミカヅキ地帯への進出は諦めたようです」
「なるほどな…」

王はそう言って椅子に肩を下ろした。そして口を開いた。

「かつては戦場で戦鬼と呼ばれ、耳長から万夫不当と恐れられていたおぬしが偵察兵とは…」

更に続けた。

「あの戦場を境に、随分と大人しくなったものよ」

「申し訳ございません」

俺はそう言って頭を上げる。そこに頭を上げるように言った後、こちらの目を見て言った。殺気とはまた違った力がある。

「ワイズ兄弟の力は、我々ジャイアント族の勝利には無くてはならないものだ。また以前のような姿を戦場で見せてくれることを期待しているぞ」

「……………はい」

俺は一瞬言葉に詰まりながらも答えた。そして王が再び語り出

す。

「よし、さがってよい」

「あ、あの…兄者！」

「うむ？」

「また外出の許可を頂きたいのですが」

王は少しの間考えた。王室内を静寂が支配する。

「最近は特に増えたな……。よかろう。ただしエルフ族には気を付けるのだぞ」

「ありがとうございます兄者。では…」

そして俺は王室を後にした。

ワイズがいなくなった王室にて。

王が自分のすぐ隣に待機している人物に話し掛けた。

「ネロよ」

「へい！」

ネロと呼ばれた人物が返事をする。彼は王の護衛をしている部隊の中で最上級に位置する人物だった。

「ワイズ兄弟の後をつけてはくれまいか？」

「オラがですか！？」

王は、うむ、と言って頷いた。

「ワイズ兄弟は恐ろしく勘が良い。並のジャイアントではヤツを追う事は出来ない」

「で、でもどうして！？」

「ワイズ兄弟が最近、エルフと接触しているとの噂があるのだ」

「嘘だ！ ワイズ兄弟ほど愛国心のある人がそんなこと！！」

ネロが叫んだ。彼はワイズとは昔からの友人だった。信じられないと言った様子である。

「うむ…。嘘であるとは信じてはいるが、もし本当ならば、ジャイアントにとって不利な戦況を招く事になる」

「それは…」

王の言葉は確実に的を射ていた。ジャイアントの情報が敵に漏れてしまうと、それが敗北に繋がらないとは限らないからだ。

「頼んだぞ」

「わかったよ兄者！」

そう言つて猛スピードで王室を出ていった。

残された王が呟いた。

「ワイズ兄弟よ……。願わくば嘘であつて欲しいものだ」

俺はある場所に向かつていた。ナイルから東南にある木に囲まれた湖。

そして目的地にたどり着き、とある人物がいることに気付いた。俺はその人物を確認した後する。そして何故か溜め息が出た。

近くに寄り、後ろから話し掛ける。

「またここに来てたのか」

その人物は振り向かずして俺が誰だか分かったようで、「フフ、アナタこそ」と言つてこちらを振り向いた。

相変わらずエルフと言つことを忘れてしまいそうな大きな目に、

透き通った薄いピンク色の髪。そしていつもの笑顔が向けられた。

俺は何も言わず隣に行ってから座り込んだ。俺が座って、やっと同じ身長になる。

目の前には湖が広がっていた。この大陸は一年中雪に包まれているのだが、不思議とこの湖の水は凍らなかった。

「最近随分とここに来る機会が増えましたね」

「お互い様だな」

コイツの名前を『フィーネ』と言った。あの戦場から帰り、次の日にこの湖に来てみると本当にコイツがいて驚いた。しかし、不思議と殺意は無かった。その日から、たびたびやって来ては適当な会話を続けていた。

「この湖にはエルフが活動するために必要な魔力の流れが多く含まれています。ボーツと見つめているだけで落ち着きますよ」

そして湖を見つめた。

「それは…居心地がいいのか？」

フィーネが笑いながら答えた。

「フフ、でなければこんなに通わないでしょう？」

確かにそうだ。ここはジャイアントの大陸。エルフの大陸は海を挟んでむこうがわにあった。特別なことが無い限りは通わないはず

だ。

「最近のジャイアントさんたちの様子はどうですか？」

「相変わらずだな。チャンスがあればいつでも戦闘を仕掛ける勢いさ」

「それもお互い様と言うことで」

『あは』

この時俺の頭にフィーネと出会ったときの出来事が思い浮かんだ。

本当によくわからない。

「どうしました？ いつもよりボーンとしてますよ？」

顔を覗き込みながらそんなセリフを言った。驚いて少しだけ下がる。

「いや、昔のことを思い出してな」

そしてフィーネの方を向いて言った。

「本当にお前は変わったエルフだな」

「そうです??？」

フィーネは軽く眉間に皺をよせ口を尖らせた。その様子から本気で怒ってないことがわかる。

「私から見れば、ワイズさんかなり変わったジャイアントですけど」

「本当にお互い様だな」

少しの静寂。フィーネは首を斜めにして目をつぶりながら鼻唄を歌っていた。どこか懐かしい。
やがて、俺が先に口を開いた。

「いったい俺はどうしてしまったんだろうな」

フィーネは相変わらず目をつぶり、体を軽く揺らしながら気持ちよさそうな様子だった。俺は続ける。

「昔は戦神とジャイアント族から称えられ、自分たちが正しいと信じこみ、ただひたすら戦を繰り返したが、結局何が正しいか分からなくなった」

フィーネはゆっくり目を開けてこちらを見る。

「先が見えるなら、希望が見えるなら好きにすれば良いかと思いますよ」

「お前は、どんな未来を望む？」

「私ですか！？ えーっと…」

急でびつくりした様子だったが、やがて俺に向かって言った。

「みんなが元気でいてくれれば、良いかと思いますよ」

「それは、ジャイアントも含めてか？」

再び笑顔を見せる。コイツの笑顔はどこか神秘的で、よく分からない気持ちになる。

「もちろんです。私には戦争の先は見えませんが」
『あは』

「そうか…」

静かになるとフィーネは再び瞳を閉じる。

「出来るなら、俺も見てみたいよ」

争いの無い、平和な世の中をさ。

どれ程経ったか分からない。辺りが少しだけ薄暗くなっていた。

「じゃあ、そろそろ帰るよ」

「はい、私はもう少ししてから帰りますね」

こうして俺は湖を後にした。

「わ、ワイズ兄弟が!?!」

ネロは目を擦ってから再び前方に目をやった。

「ひぎああ!」

まさかあのワイズ兄弟が……。

「オラ、どうしよう……」

その時、ワイズと一緒にいるエルフの声が聞こえた。

『最近のジャイアントさんたちの様子はどうですか?』

「ひいいい!?!」

これはもう決定的なセリフだった。

「たたたた大変だ！ 兄者に伝えないと！」

そう言つてネロはナイルへと大急ぎで歸つたのだつた。

2章

「なんだと…？　ワイズ兄弟がエルフと…」

驚きを隠せない王の言葉にネロが力なく返事を返す。

「へい……。信じられないけど…」

「そうか…」

そう言って王は顎髭を数回なでた。やがてネロに向かって言う。

「明日だ」

ネロはうつむいていたが、顔を上げて王を見る。

「同じ時間に兵を向かわせる。相手はあのワイズ兄弟だ。手荒になっても構わない」

ネロは悪戯を注意された時の子供のように、申し訳なさそうに答える。

「でも…、あまり気がならないのだ！　きっとなにか訳があるだよ！」

「そう思いたい…。軍の情報漏れは致命傷になる」

声の音量を下げ、呟くようにして「許せ、ワイズ兄弟」と言っ
て背もたれに体を預けた。

「只今戻りました」

俺はフィーネのいた湖を後にすると、特に寄り道はせずになっ
すげナイルに帰った。

「うむ、今日はゆっくり休むがいい」

「はい、兄者」

そして俺は城の内部に用意されてある自分の部屋に向かった。

「ワイズ兄弟…」

ネロが力なく囁いたが、俺の耳に入ることは無かった。王室が
異様な雰囲気にもまれていた。

次の日も俺は任務を終えて王に外出の許可を貰いに行く。

「兄者、今日も許可を頂きたいのですが」

王は悩み答える。

「やはり、今日も行くのか？」

「……はい」

再び王室が異様な雰囲気包まれた。ネロが王を悲しそうに見る。

「兄者……」

「しかたがあるまい、気を付けて行くといい」

「ありがとうございます」

いつもの見慣れた道を歩いて行く。雪原の大地をどこまでもど

こまでも。

今日も雪が少しだけ降っていて、足跡を一つ一つ消してゆく。

湖に着くと、またフィーネが座りながら湖を見ていた。

「……やあ」

「こんにちは」

毎日変わることのない、いつもの笑顔だった。笑顔を見せた後「今日も平和ですね」と言った。俺は「そうだな…」と、適当に返す。

「ワイズさんはこんな話を聞いたことはありませんか？」

「どんな話だ？」

「愛し合ったエルフの女性とジャイアントの男性のお話です」

「!？」

俺は驚いた顔でフィーネを見た。フィーネはニッコリ笑って、話を続けた。

「ある二人のエルフとジャイアントが当時から戦争の絶えなかった中で愛し合ってしまったんです」

「見つからないように内緒で会っていたのですが、ある日、エルフ

の町に住む兵士に見付かってしまったのです」

「……………」

俺は黙ってその話を聞いていた。

「エルフの町の人々は、そな女性にジャイアントの情報を探るように命令します」

「それで結局、自らの町の人々に絶望したエルフの女性は、『封印の洞窟』と呼ばれる場所で自らの命を絶った、というお話です」

「ジャイアントの男はどうなったんだ？」

その言葉を聞いたフィーネは少し考える。

「旅に出たと聞きますが、その後どうなったのかは分かりません」

「真実はすべて闇の中か…」

そこで俺はあることに気付く。

「しかし、なんでお前がその話を知ってるんだ？」

「フフ」

俺の言葉がおかしかったのか、フィーネは口に手をあて、クスクスと笑った。

「あくまでもおとぎ話ですよ　ワイズさん本気にしちゃって可愛い

です」

「そ、そうか…」

再びフィーネがクスクスと笑い始めた。

その時、林の陰から数名のジャイアントが現れた。

「そこまでだ！」

俺たちは一斉に振り替える。そこにはナイルの兵士たちが武器を構え、並んでいた。

「しまった！ 見つかったか？！ フィーネ！ お前だけでも逃げるんだ！」

「そんなわけにはいきません！」

やや脅えながらも、胸元から魔法を唱えるためのワンドを取り出す。

ジャイアント兵士たちの一人が俺に向かって言った。

「ワイズ兄弟！ どうか退き下がってはくれないか？ なるべくジャイアント同士での交戦は避けたいのだ」

「フィーネを逃がしてやるんだったらおとなしく退こう！」

ジャイアント兵士は首を横に振りながら答えた。

「それは出来ない！　そのエルフがスパイの可能性もあるからな！」

「交渉決裂だな！」

俺がその言葉を言い放つと同時に戦闘が始まった。
相手は六人。全員槍を装備している。

飛びかかってきた一人を回避して、勢いを利用してそのまま投げ飛ばす。

相手はそのまま地面に激突した。ピクリとも動かなくなったが雪がクツシヨンの役割になっているため、死にはしないだろう。

そのまま武器を奪い取り、頭の上で振り回した。

『うわぁっ！』

鎧の上から強烈な打撃が加わり、二人の兵士がよろめいた。
トドメに打撃を加え失神させた。

『くっ！』

残りのジャイアント兵士がフィーネに向かって行った。

「フィーネ！　避ける！」

しかし、フィーネは避けようとはせずに魔法を唱えた。

「ブリザード！」

吹雪が敵の足元を襲い、動きをとめてしまった。
残された一人を見て、俺は言い放った。

「まだやるのか？」

「く……、怯むな！ 行けえ！」

木の陰からさらにジャイアント兵士が現れた。

「ちっ、俺一人になんて数だ」

ジャイアント兵士達が襲いかかってくる。

「きゃあ！」

突然フィーネの悲鳴が聞こえた。

「フィーネ！ ぐっ……」

フィーネを見た矢先、俺の体に槍の先端が刺さる。槍を掴み、
一気に上に持ち上げた。敵が宙を舞った。

「まだわからないのか！？ お前らが何人束になっても無駄だ！」

言った直後、体が揺れた。どこかおかしい。

「くそっ……」

「こんなこともあるつかと、槍に特殊な麻酔を塗ってある」

「貴様……」

ジャイアント兵士が他の兵士に命令をする。

「よし、ワイズ兄弟を連れていけ！」

「う……………」

「離せっ！ フィーネを治療しないと死んでしまう！」

力が入らない。意識が遠くなる。

「頼むから離してくれ！」

「わ……私は大丈夫ですから……あはは……………」

「フィ……………ネ……………」

そして視界が真っ暗になった。

目覚めると、そこは城の部屋だった。体を起こすと同時に、頭に軽い痛みが走った。

「どうやら大丈夫らしい。」

「寝てたのか…」

そして腕に巻かれた包帯を見る。

「フィーネ……」

フィーネ！？

フィーネはどうなった！？

俺は勢い良くベットから起きて王室へと急いだ。

やがて王室に辿り着く。そして王座に座っている王の前に立った。

「気分はどうだ？」

「いえ…まだ少し頭が揺れるくらいで…」

王は「そうか…」と言って黙ってしまった。俺が聞きたいのはそんなことじゃない。

「それより、フィーネ…いや、あのエルフはどうしました！？」

王は暫くこちらを見つめる。

やがて目をつぶりながら首を横に振った。

言葉がなくても、その行動を見るだけで理解できる。

死んだ。

殺された。

フィーネ死んだ。

フィーネが殺　。

「そんな……どうしてですか!？」

王は落ち着いた様子で言った。

「我々はジャイアント。エルフと仲良くすることは出来ないのだ」

「わかりません!　フィーネが一体何をしたと言っんですか!？」

「すまない……分かってくれ……」

今まで国のために戦い続けてきた。

エルフ。

ジャイアント。

エルフ。

ジャイアント。

エルフジャイアント

エルフジャイアント。

何が良いのか分からなくなってきた。

「もう、戦争なんてしたくない……もう……」

「すまん……としか言えない」

王は再び黙ってしまった。言いたいことが分からない訳ではない。しかし、それはフィーネがスパイだったら、という話だ。

黙って立ち尽くす俺に向かって王が語りかける。

「ワイズ兄弟よ……。お前がどんなことをしようが、我々は血の繋がった誇り高い兄弟だ。どんな刑に処することもできん」

黙って王を見つめていた。

「しかし、エルフとの争いを忘れた者をナイルに置いておくわけにはいかんだ。分かってくれるな？」

「……………はい」

俺は少し間を置いてから続けた。

「この程度の処置にしていいただき、感謝します」

俺の言葉に王は頷き、やがて言い放つ。

「今日中にここを出て行ってくれ」

「はい。では失礼します」

「うむ…。いつかまた戻って来てくれることを信じているぞ」

俺は振り向きもせず王室を後にした。

街に出て入り口へと向かう。人々の視線が集まるのが分かる。中には露骨に指を指してから内緒話をしている者もいた。

どうせ出ていく。気にもならない。

そして、街の入り口に付近に着いた時だった。

「ワイズ兄弟〜！」

ネロが勢い良く走ってきた。そして俺の前に来る。

「オラのせいなんだ！　オラが…うう、秘密をばらしたりしなければ…ひつく」

顔中しわくちゃにして鼻水を垂らしていた。周りの目を気にする様子もなくただ泣いていた。

俺はネロの頭に手を置く。

「命令だったんだろ？　仕方がないさ。それにお前のことだ、一度は信じてくれただろ」

その言葉を聞いたネロは「うんうん」と言いながら泣き続けた。
いた。

「じゃあ、そろそろ行くよ」

「戻って来るよね！？」

ネロが必死にこちらを見て言った。

俺は何も答えずネロに背を向け、ナイルを後にした。

湖に来てみたが、そこにはもうフィーネの姿は無かった。遺体もない。きっと兵士たちに…。

「くっ…」

俺は地面を見た。雪原の中に、なにやら輝く物体が落ちていた。

「水晶か？」

ピンクの色をした丸い物体。太陽にかざして見ると、綺麗に透き通った。フィーネの笑顔が見えた気がした。

俺は水晶らしき物体をポケットに入れる。

「フィーネ…君の意思は俺が受け継ぐよ」

「エルフとジャイアントが……争いのない平和な世の中にしてみせる」

必ず。

「じゃあ、行ってくるよ」

こうして、俺の行くあてもない旅が始まった。

3章

世界にはいくつかの大陸がある。そして、この世界には、ジャイアント、人間、エルフ、獣人と呼ばれる、モンスターとは違う、知能が発達している、文明を持った種族が暮らしていた。しかし、世界には未開の地が沢山あり、まだまだ俺の知らない種族がいるかもしれない。

「寒いな……」

俺はナイルを出ると、ただひたすら北に歩いていた。特に行く先が決まっている訳じゃない。産まれた時から戦闘の術を叩き込まれ、そして、戦闘だけで生きてきた俺にとって、金もなく知識も無いこの状況は少々苦しかった。

風も次第に強くなり始め、降り積もる雪が容赦なく横殴りに吹き荒れる。ジャイアント族伝統のコートの様な防寒具を着ているとは言え、やはりこの地の風は寒かった。

「とりあえず宿を探さないと……」

いくらなんでも野宿は確実に死を意味していた。当たり前だが。

暫く歩いていると、突然高い声の叫び声が聞こえた。

『ルビーショット!』

俺は殺気を感じ、反射的に前方に屈んでいた。頭上スレスレで『なにか』が通過する。少しでも遅ければあの『なにか』が頭に直

撃していただろう。

俺はすぐに体勢を立て直し、身構えた。

「誰だ!？」

『え？ 喋った…』

吹雪で視界が狭くなっていた。やがて姿を現す。

『あ………』

奇妙な格好をした女性だった。青のトンガリ帽子を身に付けマントを身に付けついる。隠れ気味ではあるが帽子とマントの隙間から、ブルーの髪が少しだけ見える。手を口元まで持って行くと、魚のようにパクパクさせていた。

『いやあゝん！ 今度こそやったと思ったのにいい!』

そう言つて力の抜けたように地面に座り込んだ。そしてただこねるように叫んだ。

『うえゝん！ まさか人だったなんてえ！ お腹すいたああ!』

「何してるんだ？」

俺が話しかけると、何かを思い出したように駆け寄つて来た。

『お姉さん！ 大丈夫!？』

ん？ 何かおかしいよな。

「ちよつと待て。俺は男だ」

『はっ！』

目を見開き、再び口を押さえる。

『まさかダメージのせいで記憶がおかしく！？ やだっ……どうしよう…。だっ、大丈夫ですかっ！？』

俺は溜め息をついた。そしてこの女の首根っこを掴み引き上げる。

「ほら、この通り無傷だ。」

そして降ろす。啞然としていた。

ああ、コートを着ていて肉体が隠れてるから間違われたのかもしれない。

『す、す……い』

そして急に目を輝かせ始めた。なんて表情の豊かなヤツだ…。

『へエ……ふん……わあ』

なにやらブツブツ呟きながら俺の周りを回った。

『ねえお兄さん！ 何か食べに行かない！？』

「……………え？」

いきなり何を言い出すかと思えば…。

「いや、俺は先を急いでるんだ。すまない」

そう言つて立ち去ろうとする。すると回り込むようにして目の前に立ちはだかる。背は俺の半分以下で見上げるようにしてこちらを見ていた。

「お兄さんジャイアントだよね！？ 先を急いでるって、どこに！？」

容赦ない質問だな。

「ジャイアントだ。行く先は……」

困った。しかし、適当に誤魔化さなければいけないな。

「……北だ」

その言葉を聞き、しめた、と言う顔をして、

「あゝ、嘘だゝ！ ここから北は海岸があるだけで何も無いよ！ あるのは変な魔法を研究している怪しい黒魔道士の家だけ！」

と勢いよく言い放った。

しまった……。海岸か……。知らないうちに大分歩いていたようだな。

どうやらこれ以上は嘘をつかない方が良さそうだ。

「食べに行く…」とか言ったな。それで狩りをしていた訳か」

「うん……。喧嘩して家出したのは良いけど、なかなか食料的な問題がねえ」

そして背伸びをして「また街に言っただけ食べるしか無いのかな、でもお金がなあ」

「なるほど、それで俺に金を出して貰おうとした訳か」

「ギクッ！」

なんてわかりやすいヤツだ…。背伸びの動きが途中で止まった。

「残念ながら金はない」

すると女は、うゝ、と口を尖らせた。そして、

「じゃあさ、狩りを手伝ってよ！ テントはあるからさ！ 料理は出来るよ！」

と言ってきた。

テントか…。確かにそれがあれば助かるな。

「わかった。手伝おうか」

「わゝい！」

女が跳び跳ねた。そして急に真面目な顔になり人差し指を自分の鼻付近まで持って行き、俺に向かって言った。

「狩りは危険よ！ この辺りには恐ろしいモンスターが沢山いるんだから」

何やら得意気だった。そして、フフン、と言いながら目を閉じた。

「モンスターねえ……」

俺はそう呟きながら近く似合った折れた丸太を持ち上げた。

「ち、ちよつと……一体何をする気！？」

慌てた様子で俺に言った。俺はある程度距離をとり、

「下がってる」

そして木をある方向に向かって、勢いよく投げつけた。

「……………」

訳のわからない、と言った様子で女はこちらを見ていた。

俺は黙って木を投げた方向に向かった。女もとりあえずついてくる。そして、

「モンスターと言うのはコイツか？」

そこには丸太が直撃して気を失った巨大な牙のある豚のような生き物が倒れていた。

「あ……えっと……。あは……。あははは」

女は固まったまま動かなかった。笑い声だけが雪原の風の音に混じり、響いていた。

テントに入り、鍋を囲む。先程のモンスターはこの女が料理してくれた。

「ひゅごいね、なじえもんしゅたーがいりゆとわかってやの？」

固い肉を噛みちぎりながら俺に向かって質問していた。何を言ってるのかわからなかったため、俺はスープを飲みながら無視をした。

少しの時間がたち、やっと肉を呑み込んだようで、同じ質問をしてくる。

「凄いねー！ なぜモンスターがいるとわかったの？」

強いヤツだな……。思わず軽く笑ってしまう。

「会話の途中あたりか……。こちらの様子を見ながら近付いて来るのがかった」

「すごい！ 野生の勘！？」

「……そんな感じだ」

そう言つて無くなった皿に料理を盛り付けた。相変わらずこの女は目を輝かせながらこちらを見ていた。

「へえ……うんうん……わあ……」

やがて、まともな言葉を喋り始めた。

「名前を聞いても良いかな？ 私はマリィネ。魔法の研究をしているの」

どうやら先程の俺の頭上をかすめた『なにか』は魔法だったらしい。

「ワイズだ。今は訳あつてナイルには戻れない」

「ワ、ワイズ!？」

急にマリィネが顔色を変え後退りした。

「い、いやあ……、幼少期に生き物の骨をへし折ることに快感を覚え、一日に一度は血を見なければ気が狂い暴れだし、拳げ句の果てに見方までも殺し始め、王さえも手出しが出来ず、周りにいる『全ての生命』から恐れられている人物……ワイズ……様……」

そして頭を下げながら必死に叫んだ。

「すすみませんでした！ 先程の無礼をお許してください！ 体だけはああ！」

「……………」

噂はと言うものはここまで勝手に一人歩きするんだな…。

「いや…、大丈夫だ。そんなデマ情報気にするな」

「…ふえ？」

ヒョッコリと顔をあげた。目には涙が浮かんでいる。

「戦争だからな。幼い頃から戦うのはしょうがなかった。しかし、そんなに悪趣味じゃない。生きるためだ」

「ほえ？」

「それに、王さえも手がつけられないと言ったが、仮にそうだとしたら現に俺をナイルから追い出したのは誰になる？」

「……………あ」

マリーネは何か納得したようだ。

「だ、だよね、何かおかしいと思ったよ、あはは……………」

「大体おかしいだろその話……………」

「そう?。」

マリーネは真面目に悩んでいた。

「でも、エルフから恐れられていたジャイアントだよね」

エルフから恐れられていたジャイアント…。コイツは知らないだけだ。怒っても意味がない。

「……ああ。昔はな。今はエルフとジャイアントが仲良くなる手段を探している」

「え? エルフとジャイアントが?」

不思議そうにこちらを見る。

「エルフとジャイアントについて研究をしている変人さんなら知り合いにいるよ!」

「え? それは本当か?」

「うん。普段は魔法を研究しているんだけど、趣味でいろんな研究をしてるよ」

そんな人がいたとは…。どうせ手掛りは少ないんだ。行ってみる価値はありそうだな…。

「明日でいい。案内してくれるか?」

外はすでに暗かった。今歩くのはまずいだろう。 マリーネ
はなぜか少し悩んでいた。

「うーん……緊急だもんね……、しょうがないっか」

何やら呟いていた。

「無理はしなくても良いんだぞ？」

「いやいや！ こっちの話で！ あはは……」

そして苦笑いをする。 なにか事情がありそうだった。

「あれ、ワイズ……横にならないの？」

「ああ」

テントの中でマリーネが毛布を被り、頭だけを出している。
俺が横になるにはテントが狭すぎる。 それに……

「戦場でどんな体勢でも休まないといけない時がある。 慣れてるよ」

「まーまーそんな事言わずに」

マリーネはそう言いながら起き上がり、俺の手を引っ張った。両手を使っても俺の手を完全に包むことは出来ないようだ。

「……………」

マリーネの力では、俺を動かす事が出来るはずもない。俺はしようがなく頭を掻き、わざと引っ張られた。

そのまま足を折り曲げて横になる。

「ふふ、いい子いい子」

マリーネは何だか嬉しそうに頭を撫でてきた。そして毛布を俺の上に向け、中に潜り込んだ。

「わあゝ、やっぱりあったかあゝい」

毛布の中で暫く何やらモゾモゾしていたが、やがて寝息に変わった。

「……………んにゃ……………」

そして俺はゆっくり毛布布団から出た。

「悪いな…他人が近すぎると眠れないんだ」

何故だかわからないが、幼い頃に親を離れ、ひたすら国に遣えていた俺は、一人で眠るのが習慣になっていた。戦場で身を潜めて眠ることも多かったせいでもあるが…。

そして座り込み、目を閉じる。

「……おかあ……さん」

マリーネの寝言だった。何やら悲しげな雰囲気がある。

「母さん……か」

そんなセリフは幼少期以来だな。コイツにも何かあったのだからうか。

マリーネの頭を二、三度撫でてやる。

「……………」

すると再び寝息に変わった。

俺は再び目を閉じ、眠ったのだった。

4章

「さて、そのエルフとジャイアントを研究している人間のところへ案内して貰おうか」

「はい！ まかせて！」

朝から機嫌が良いようだ。本人曰く「良い夢を見た」らしい。特に深くは触れなかった。

そして俺たちは目的地に向かった。そこであることに気付く。

「あれ、この方角には海岸があるとか言っただけだったか？」

「そうそう。海岸沿いにある家だよん」

「たしか変な人がいるとか…」

マリィネはその言葉に反応したようだった。

「そう！ 変！ ヘ・ン・ジ・ン！ 朝から晩まで研究ばかりして変人さんよ！」

「そ、そうか」

勢いに圧倒される。恨みでもあるのだろうか？

そして再び歩き始めた。

昨日の吹雪が嘘のように太陽の光が降り積もった雪に反射する。

一時間もしないうちに目的地にたどり着いた。外観は以外と普通だった。

マリーネが先頭に立ち、扉を開けた。俺も後に続く。

「おや、ジャイアントのお客さんとは珍しいですね」

家に入るなり話しかけられる。今度は赤のトンガリ帽に奇妙な耳飾り、腕輪……。確かに見る限り怪しそうである。

「君がマリーネが噂していた黒魔道士か？」

相手は、アハハ、と言って咳払いをする。

「どんな噂かはつつこまないでおきましょうか」

そして帽子をとった。青い髪を後ろで一つにまとめている。

「いかにも、私が長年黒魔術を研究しているフレイと申します」

「家出した妹が帰って来たのに無視かつ！」

マリーネがフレイに向かってつつこんだ。ようやくマリーネの存在に気が付いたようだった。

「おや、マリーネ。お帰り」

「家出して心配しなかったのかっ！」

ポカポカとフレイを叩いた。

「いてて、家出って言うてもしょっちゅうやってるじゃないですか。

今回だって三日で帰って来てますし。それに…」

フレイはそう言って目を怪しく光らせた。

「マリーネには特殊な小型発信機をつけてあるので、どこに居るの
か一目でわかるんですよ。今回もあまり遠くに行っていないようです
ね…フフ」

「誇らしげに笑うなああっ！」

マリーネのつつこみがヒットした。これが普段の兄弟の仲なの
だろう。

そんな兄弟はさておき、取り合えず名乗ることにする。

「俺はナイルからきたワイズだ。今日はちょっとお願い」

「ワ、ワイズだって!?!」

フレイが目を丸くして跳び跳ねた。

「ワ、ワイズって、幼少期に他人の骨を粉ごなにすることにハマリ、
やがて生き血の味を覚え、毎日飲まなければ周りをこれでもかとい
うほど破壊し尽し、挙げ句の果てに部隊の仲間までも戦場で皆殺し
にしてしまい、やがてはナイル王を王の座から引きずり降ろそうと
企てているという最凶最悪のジャイアント!? 既に現在の王は殺
されて、替え玉という噂も…」

なにやら脅えている様子だった。先程のマリーネの噂よりも過
激になってないか?

そんなフレイにマリーネが笑いながら言った。

「あはは、お兄ちゃんたら、そんな噂話を信じちゃって情けない！
！ だいたいそんなのだったら私が無事で一緒に入られる訳ないじゃない！」

「そ、そうなんですか？」

恐る恐るこちらを見る。俺は呆れたように「ああ」とだけ返した。
本当にこんなヤツに相談して大丈夫だろうか？

「いやー、びつくりしましたよ。噂とは本当にいい加減なものです
ね」

いい加減過ぎるだろ…。

そしてフレイは思いだしたように研究に戻る。

「おっと、失礼」

「どんな研究をしてたんだ？」

俺の言葉に気が付いたフレイは、なにやら得意気な様子で話し始めた。この話すときの仕草は兄弟だから似ているようだ。

「完成するまでは極秘にしようかと思ってましたけど、別に隠すも

のでもないですしね。黒魔術の最高峰……」

少しの間を置き、続けた。

「その名も『メテオ』と言うものを研究していたのです」

「聞いたことがあるな……。確か伝説の魔法使いの……」

言葉の続きをフレイが喋る。

「そう、伝説の黒魔道士『タール』が町に現れたドラゴンを一発でしとめたと言われる魔法です」

ドラゴンを一撃……。種類にもよるが、一般的なドラゴンでも、ジャイアント兵士が数十人居てやっと仕留められるくらいだ。恐ろしい威力だな……。

「別に僕はそれを手に入れて世界征服だとか、そんなことは考えてないんですけどね」

フレイの音声ボリウムが上がってゆく。

「ただ、黒魔術の最高峰と言われるメテオを完成させれば大勢の人々に認められる訳ですよ。」

そしてフレイは机を勢い良く叩いた。マリーネは欠伸をしている。

「長年の研究の成果がようやくみのる訳です……!」

「な、なるほどな」

そしてフレイは「あ、失礼しました」と言っ
て咳払いをする。
マリーネがコイツを『変人さん』と言っ
ていたのも分かる気がする。

「それで、今日はなんのご用で？」

「実はな……」

「と言う訳で今はエルフとジャイアントが共存する道を探す旅に出ている。昨日偶然外でマリーネに会って、ここを紹介された、言うことだ」

「ほお、非常に興味深い話ですねえ。偶然にも私も最近、趣味でエルフとジャイアントについて調べていたところですよ」

「本当か!？」

隣で小声で「さすが暇人ね」とマリーネが言ったが、フレイには聞こえていないようだった。

「しかし、おとぎ話以外で本当に仲良くなったエルフとジャイアントがいたとは……。共存は不可能とみて歴史の研究を進めていたのですが、一瞬で考えが変わりましたよ」

「ん？」

フレイは笑顔で答えた。

「エルフとジャイアントはその昔、共に助けあいながら暮らしていたということ」

「なんだと!？」

「それに、種族が対立した後にも愛し合った人たちがいたと言うこと」

「その話なら知っている」

フィーネが最後に俺に話したおとぎ話のことだろう。

「エルフの女は自ら命を絶ち、ジャイアントの男はどこかに消えた、という話だろ？」

黒魔は目をつぶり、うたづきながらいった。

「良くご存知で」

そして、再びこちらを見て話を続けた。

「ただ、この話には深い訳があるのではないかと考えています」

まるで推理している探偵のように、呟きながら部屋中を歩き始めた。

「大体おとぎ話などは、昔あった出来事を元にして、多少アレンジが加わっていたりするもので、地域によって話が違う、なんてのは良くあることです」

確かに。そんなこともありそうだ。

「最後にジャイアントの男が旅に出る、という場面なのですが、ここは本当にいろんなパターンがあり、良く手が加えられている場面なのです」

そしてフレイは立ち止まり、一度こちらを見る。

「ある説では、そのまま彼女の後を追ひ、自ら命を…、またある説ではエルフの町に復讐に向かう話…。見事に地域によってバラバラなのです」

俺は素直に思ったことを言ってみた。

「本当にあつた話なら、その場面のことは誰にもわからなかった、ということか？」

フレイは笑顔で答えた。

「そうです。しかし、問題はその前のお話です」

そして再び推理するように足を動かし始める。

「面白いほど共通してるんですよ。町の兵士に利用されそうになり、封印の洞窟に逃げ込んで……記憶の扉を作った……と言つ話でしたが、ここがどの地域のお話を見ても共通しているんです」

「言い伝えって大体の話は同じなのは当たり前じゃないのか？」

フレイは立ち止まった。

「それを言ってしまったらそれまでですけどね。しかし…」

今度は不気味な笑みを浮かべながら言った。本当、兄弟そろって顔のバリエーションが豊富だ。

「ただし、封印の洞窟という所は実在するんですよ」

なるほど…。行ってみる価値はありそうだな。

そんなことを考えていると、今度はマリーネがフレイに向かって言った。

「その場所は代々エルフ達によって厳重に守られていて、正面から飛込むのは自殺行為よ」

そうなのか…。俺は思わず溜め息をつく。

「困ったな…。エルフとの戦闘はなるべく避けたい」

「ここから先はひたすら調べるのみ、ですね。真実は闇の中なので
すから、少しの可能性も捨てる訳にはいきません」

「手伝って…くれるのか？」

「私は賛成！ 家にいるより楽しそう！」

マリーネはすぐに話にのった。しかしフレイは考えていた。

「私も自分の研究がありますしねえ…本格的に協力出来るとは思いませんが…」

そして、何かを思い付いたように顔を上げた。

「ではこうしましょう！ 私の研究も残すところは材料集めだけなのです。手伝ってくれるなら、協力しましょう。ワイズさんの旅について行く…という形で」

そうすればどちらも得をするな。もしかしたら他の大陸に行かないと行けないかもしれない。

「わかった。出来る限り協力しよう」

するとフレイは都合悪そうに俺に向かって話しかける。

「あのおゝ早速…お手伝いをしてほしいのですが…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9268i/>

Firne ~ 恋、おとぎ話 ~

2010年10月14日23時28分発行